

鈴木三重吉作

デ^ィイ^ィモ^ィンとピ^ィシ^ィア^ィス

朗読 小畑喜代子



鈴木三重吉（すずき みえきち）

1882年（明治15） - 1936年（昭和11）。広島県広島市に生まれ。東京大学英文科卒。

夏目漱石の知遇を得、1906年（明治39）東大在学中に執筆した「千鳥」で新進作家としての道を歩む。文学的には家庭環境による孤独感と、それを癒すロマンティズムが同居しているといわれる。代表作として「山彦」「小鳥の巣」「桑の実」等が上げられるが、その後、創作活動より出版業や子供向けの「世界童話集」の執筆を手がけ、芸術としての童話の雑誌「赤い鳥」を発刊する。「赤い鳥」は当時の文壇の一流作家、詩人、画家、作曲家の賛同者を得て、新しい童話の世界を構築していくことになる。

本編は大正9年の「赤い鳥」二月号に載った。内容は、「古代ギリシア、地中海のある都市に残酷な議政官がて、謹厳実直な数学者のピシラスはその非道を諫めたが、逆に怒りを買って死刑を宣告されてしまう。その窮地を救ったのは親友デイモンの献身であった」というもの。三重吉がどの英語本から翻案、再話したかは不明だが、独裁者の孤独と苦悩、それに対するデイモンとピシラスのピサゴラス派学徒としての清らかな友情が、三重吉の簡潔な文体でよく表現されていると言えよう。

これは、二千年も、もつとまえに、^{ギリシヤ}希臘が地中海ですつかり幅^{はば}を利^きかせていた時代のお話です。

そのころ、希臘人は、今のイタリヤのシシリイ島へ入り込んで、その東の海岸にシラキユースという町をつくっていました。そこでも市民たちは、やはりみんなの間からいくたりの議政官というものを選んで、その人たちにすべての支配を任せていました。或^{ある}とき、その議政官の一人にディオニシアスという大層な腕ききがいました。

ディオニシアスは、もとはずつと下級の役に使われていた人ですが、その持^{もち}前^{まえ}の才能一つで、とうとう議政官の位地まで上ったのでした。この人のおかげでシラキユースは急にどんどんお金持になり、島中のほかの殖民地に比べて、一ばん勢力のある町になりました。

た。

それらの殖民地の中には、アフリカのカーセイジ人が建てた町もいくつもありました。

シラキュースはそのカーセイジ人たちと、いつもひどい仲たがいをしていました。ディオニシアスは遂ついでにシラキュース人を率いて、それらのアフリカ人と大戦をしました。そして手ひどく打ち負まかしてしまいました。

そんなわけで、ディオニシアスはシラキュース中で第一ばんの幅利きになりました。それでだんだんにほかの議政官たちを押しつけて、町中のことは自分一人で勝手に切り廻すようになりました。

ディオニシアスはずいぶんわがままな惨ざんこく酷な男でした。市民たちは彼のいろいろな乱暴から、ディオニシアスを蛇へびのように憎み出しました。しかし、市民もほかの議政官も、

彼の暴威に怖れて、だれ一人面と向って反抗することが出来ませんでした。

ディオニシアスには、市民たちが、すべて自分に対してどんな考えを持っているかということが十分分っていました。ですから、しじゅう、ちよつとも油断をしませんでした。

いつだれが、どんな手だてをめぐらして、自分を殺すかも分らないのです。ディオニシアスはそのために、最後にはもうどんな人をでも疑わないではおかないようになりました。

彼は牢屋ろうやの後にある、大きな岩の中を、人に分らないように、そつと下から掘り開けて、

その中へ秘密の部屋をこしらえました。そしてそこへ、牢屋から罪人の話し声がつたわつて来るような仕かけをさせて、いつもそこへ這入はいつてじいつと罪人たちの言ってることを立ち聞きしていました。

それから、自分の寢室へは、だれも近づいて来られないように、ぐるりへ大きな溝みぞを

掘りめぐらし、それへ吊橋を^{つりばし}かけて、それを自分の手で上げたり下^{おろ}したりしてその部^{ではい}屋へ出這入りしました。

^{ある}或とき彼は、自分の顔を^そ剃る理髪人が、

「おれはあの暴君の喉^{のど}へ毎朝髪剃りをあてるのだぞ。」と言って、人に威張ったという話をきき、すっかり気味をわるくしてその理髪人を死刑にしてしまいました。そして、それからというものは、もう理髪人をかかえないで、自分の娘たちに顔を剃らせました。しかし後には、自分の子が髪剃^{かみそり}を持ってあたるのさえも不安心でなくなりました。それでどうとう鬚^{ひげ}を剃るのをやめて、その代りに、栗の殻^{から}を真赤に焼かせて、それで以て、娘たちに鬚を焼かせ焼かせしました。

或日彼は、アンティフォンという男に向って、真^{しんちゆう}鍬はどこから出るのが一番いいか

とたずねました。すると、アンティフォンは、

「それはハーモデイヤスとアリストゲイトンの鑄像のが一ばん上等です。」と答えました。

ディオニシアスはおどろ愕たちまいて、忽ちその男を殺させてしまいました。ハーモデイヤスと

アリストゲイトンの二人は、希臘ギリシヤのアゼンの町の勇士で、その暴君のピストラツス

という人の子供らを切り殺した人たちです。この二人の像がアゼンに立っていました。ア

ンティフォンは大胆にもそれを引き合いに出して、ディオニシアスにあてつけを言ったのでした。

また或とき、ディオニシアスは、友人のドモクレスという人が、たった一日でもいいか

ら、ディオニシアスのような身分になつて見たいと言って、羨うらやんだということを聞き出し

ました。それですぐにそのドモクレスを呼んで、さまざまの珍らしいきれいな花や、香料

や、音楽をそなえた、それはそれは、立派なお部屋にとおし、出来るかぎりのおいしいお料理や、価のたかい葡萄酒を出して、力いっぱい御馳走ごちそうをしました。

ドモクレスは大喜びをしました。しかし、そのうちにふと顔を上げて見ますと、自分の頭の真上には、鋭く尖とがった大きな刀が、一本の馬の尾の毛筋で真つ逆さに釣り下げられていたので、びっくりして青くなりました。これはディオニシアスが、おれの境遇は丁度この通りだということを見せてやろうというので、わざわざ仕組んだのでした。

ディオニシアスは、こんな乱暴な人でしたけれど、それと一しよに、一方には大層学問があり、色々の学者や詩人たちを、いつも側そばに集めていました。そして自分でもどどん詩を作りました。

或ときディオニシアスは、フィロセヌスという学者が、自分の作った詩をけなしている

と聞いて、大層怒おこって、すぐにつかまえて牢屋へ入れました。

そのうちにディオニシアスは、また一つ詩をつくりました。そして自分では、こんな立派な詩はちよつとだれにも作れまいと大得意になって、早速フィロセヌスを牢屋からよび出して見せつけました。フィロセヌスがその詩を読んでしまいますと、ディオニシアスは、どうだ、それでもまだ悪いというか、と言わぬばかりに、相手の顔を見下しました。

するとフィロセヌスは、何にも言わずに、くるりと獄卒の方を向いて、

「おい、もう一度牢屋へ入れてくれ。」と言いました。

ディオニシアスもこのときばかりはくすくす苦笑いをしました。そして、相手の正直なことを褒ほめる印しるしに、そのまま解放してやりました。

しかし、ディオニシアスについて伝えられているお話の中で、一ばん人を感動させるのは、^{おそ}怖らくピシアスとデイモンとのお話でしょう。

この二人は、どちらもピサゴラスの学徒と言って、ピサゴラスという、ずっと昔にいた学者の教えを奉じている人たちでした。

ピサゴラスという人は、どんな人で、どんなことを説いたかということは、今ははっきり分っておりません。ただ、この派の学徒たちは、すべて感情を殺すということ、その中でもとりわけ怒を押えること、そして、どんな苦しいことでも、じつとがまんするということを、人間の第一の務めだと考えていました。こういう風に自分の感情や欲望を押えつけることを自制と言います。ピサゴラスの学徒は、人間はこの自制が少しでも多く出来れ

ば出来るほど、それだけ神さまに近づくのだ、生がい完全な自制を以て突き通して来た人は、死んだ後には神さまになれる、その反対に、少しでも自分を押えつけないことが出来な
いで、いろいろの悪いことをしたものは、次の世には、獣や、またはそれ以下の動物に生
れて来るのだと信じておりました。

それらの学徒は、お互に、いつも固く団結して、いろいろの学問を修めていました。特
に数学と音楽とを一ばん大切なものとして研究しました。

その学徒の一人のピシアスという人が、シラキュースに来ておりましたが、それがいつ
もディオニシアスに反抗しているようににら睨まれて捕縛されました。ディオニシアスはい
きなり死刑を言いわたしました。

ピシアスは、それでは仰おおせのままに殺しておもらいしましょうと言いました。しかし、

そのまえに一つお願いがあります、私は希臘ギリシヤに土地を持っており、身うちのものもおります。それで、一度あちらへかえって、すべてのことを片づけておき、すぐにまた出て来て処刑を受けますから、どうぞしばらくの間お許しを得たいと言いました。

ディオニシアスはそれを聞いて嘲笑あざわらいました。そんなにして、まんまと遠い海の向うへ遁にげた後に、またわざわざ殺されにかえる馬鹿があるものか、そんなふざけた手でこのおれがまる円められると思うのかというように、からからと笑いました。

ピシアスは、

「しかしそれには、私がかえるまで、身代りになってくれるものがいるのです。私の友だちの一人がちゃんと引き受けてくれるのですが。」と言葉をついで言いました。

「ははは、それはお前がからかわれたのだよ。そんなことで、むぎむぎ命を捨てるお人よ

しがどこにしよう。」とディオニシアスは笑いました。

すると、そこへデイモンという人がすかさず出て来ました。

「どうぞ私をピシアスの代りにおとめおき下さい。もし、ピシアスがあなたを欺いて、御指定の日までにかえってまいりませんでしたら、すぐに私をお殺し下さい。」と言いました。

ディオニシアスは、デイモンのその申出を聞いて、むしろびっくりしてしまいました。

そして、よし、それではピシアスの言うとおりにさせてやろうと言いました。ともかくそれは、デイモンの馬鹿さ加減を試す^{ため}のに丁度おもしろいと思っただけでした。

デイモンは代って牢屋へ閉じこめられました。ディオニシアスは、獄卒に言いつけて、たえずデイモンの容子^{ようす}を見張りをさせておきました。しかしデイモンは、いつまでたってもちよつとも不安そうな容子を見せませんでした。

「私はピシアスを信じている。ピシアスは立派な人だ。決してうそはつかない。もし、万一、あの人のかえりがおくれたとしたら、それは、彼のわるいせいではなく、やむをえない不意の出来ごとが妨げをしたのである。そのときには私はよろこんであの人の代りに殺されて見せる。」

デイモンはこう言って落ちつき払っておりました。

ところがデイオニシアスが考えていたように、とうとう定めの日が来ても、ピシアスはそれなりかえって来ませんでした。デイモンはそれでもまだ平気でいました。

「これは来る途中で海が荒れでもしたのに相違ない。何、私が殺されればそれでいいではないか。」とデイモンは獄卒に言いました。

デイオニシアスは、それ見ると笑いました。そして、いよいよ今日の何時までにかえら

なければお前を殺すからそう思えと言いわたしました。

間もなくその時間が迫って来ました。デイモンは容赦なく死刑場に引き出されました。

獄卒は死刑の道具をそろえて待っていました。デイモンは、もう二、三分間もたてば冷たい死骸しがいになってしまふのです。しかし彼は、その間際まぎわになっても、ピシアスは決してうそをついたのではない、ただ、やむをえない事情でおくれたのだと信じていました。

すると、そこへ、ピシアスがひよいとかえってきました。ピシアスはデイモンの手を取って、ああ、丁度間に合ってよかったと喜びました。そして、にこにこ笑いながらデイモンと代ってしずかに死刑を待っていました。

デイオニシアスはすっかり愕おどろいてしまいました。

そして、即座にピシアスの罪を許してやりました。こんな立派な人を殺すことは、いく

らこの暴君にだって出来るはずはありません。ディオニシアスは、それから改めて二人を自分のそばへよびました。

彼は、これまでかつて人を信ずることの出来なかった、哀れな人間です。彼はしたいままの乱暴をしました。そうしておいて自分の命を少しでも長く盗むために、あらゆる人をうたぐ

疑うたぐりました。そのためには多くの人をどんどん殺したり押しこめたりしました。ですから彼はピシアスとデイモンとの二人のこの信実と友愛とを見ると、本当に何よりもうらやましくて堪たまりませんでした。

彼は二人に向つてたのみました。

「どうぞ、これから私をもお前さんたち二人の仲間に入れておくれ。そして三人で本当の友だちになりたい。」

こう言って、ピシアスとデイモンの手をとったということです。